

## ウイグル語における「動詞語幹-(i)wet-」の構造

藤家洋昭 (大阪大学)

Reyihan Pataer (甲南女子大学)

### 1. はじめに

ウイグル語には、ウイグル語伝統文法<sup>[1][2]</sup>で "tüs kategoriyesi" と呼ばれるものに入る、動詞が二つ組み合わさったものがある。多くは、「動詞語幹-(i)p 動詞」というパターンになり、二つ目すなわち後ろに来る動詞のことをウイグル語伝統文法では、"yardemchi pe'il" と呼ぶ。"tüs kategoriyesi" の入るものの中に、「動詞語幹-(i)wet-」という形のものがある。このタイプのものは、他が「動詞語幹-(i)p 動詞」というように、2語であることがはっきりしているのと違い、表面上あたかも1語のような形をしている。この、「動詞語幹-(i)wet-」がどのような文法的性質を持ち、どのような構造のものであるかこれまでほとんど明らかにされていない。本研究では、ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」を記述し、その文法的性質と構造を明らかにする。

### 2. データ

ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」の基本的な用例は、次のとおりである。

#### (1) Tursun qelemni yerge **chüshürüwetti**.

トルスン(人名) ペンを 地へ  
chüshürüwetti

「トルスはペンを床に落としてしまった。」  
chüshürüwetti の部分は、次のように分解できる。すなわち、

動詞語幹+(i(~ü~u))+wet+テンス

「動詞語幹-(i)wet-」の語形変化は、基本的に -(i)wet- の部分が担い、-(i)wet- が動詞と同じようにテンス、人称などの変化をする。

例：chüshürüwét•imen (現在一人称)「私は落

としてしまう」、chüshürüwét•idu (現在三人称)「彼は落としてしまう」、chüshürüwet•ti•m (過去・一人称単数)「私は落としてしまった」、chüshürüwet•ti (過去・三人称)「彼は落としてしまった」。

"tüs kategoriyesi" に入るとされるもの多くは、「動詞語幹-(i)p 動詞」という形をとる。「動詞語幹-(i)p」は、「～して」という意味を表す。後に来る動詞は、ウイグル語伝統文法で "yardemchi pe'il" (補助動詞) と呼ばれるもので、動詞本来の意味を失っているが活用などは動詞の性質を持っているものである。そして、もともと何という動詞であったかが、例えば、qoy- であれば、qoy-「置く」という動詞であるというように、容易にわかる。これに対して、-(i)wet- の場合は、もともと何という動詞であったかよくわからない。先行研究においても定説がなく、-ewet<sup>[2]</sup>、-et<sup>[1]</sup>であるとされている。さらに、このことと関連して、「動詞語幹-(i)wet-」がどのような構造であるのか、そもそも、1語なのか2語からなるものなのかという問題があるが、これまでの研究ではよくわかっていない。

意味的には、先行研究<sup>[1]</sup>によると、(1)動作の完結 (2)動作が思わず、徹底的に行われることを表す。これらの意味を前に来る動詞に付け加え、「～してしまう」などと訳することができる。

生産性という観点でみると tiqiwet- (< tiq-「詰める」)、échiwet- (< ach-「開ける」)、külüwet- (< kül-「笑う」)、dewet- (< de-「言う」)、éliwet- (< al-「買う」)のように、さまざまな動詞と結びつくことができるように

も見えるが、どのような動詞に **-(i)wet-** が付き得るかについては、詳しくわかっておらず、今後の研究が必要である。

以上のように、不明な点が多くあるが、本研究ではこの中で、特に構造に注目し、「動詞語幹-(i)wet-」が形態的あるいは統語的にどのような構造をなしているかを明らかにする。

### 3. さらなるデータと分析

本章では、ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」が形態的あるいは統語的にどのような構造をなしているか、さらなるデータを加え考察し分析する。

明らかにされるべきことは、「動詞語幹-(i)wet-」が、統語的に補文構造等の構造をもっているか、形態的に1語になっているかといった文法的性質である。

"tüs kategoriysi" に入るとされる、他の多くが「動詞-(i)p 補助動詞」というパターンをとることから、**-wet-** も、もとの動詞が何であるかわからないなど特殊な点はあるが補助動詞であると仮定する。

#### 3.1 意味上の主語

前述したように、**-wet-** が補助動詞であるという仮定で議論を進めると、補助動詞も動詞の一種であり、動詞であれば主語があるはずであるということになる。「動詞語幹-(i)wet-」について見てみると、表面に現れる主語は1つである。

(2) Tursun qelemni yerge **chüshürüwetti**. = (1)

(2) の文には表面に現れる主語を "Tursun" 以外にこれ以上たてることはできない。それでは、表面に現れない主語はどうだろうか。表面に現れない主語を考える際に重要なことの一つとして、繰り上げ (raising) とコントロール (control) がある。そこで、**-wet-** がどちらであるか分析する。分析の枠組みは主辞駆動句構造文法 (HPSG) [3][6]による。

繰り上げは、主節の主語と補文の主語が単一化されるもので、繰り上げ動詞の語彙項目は次のようになる [9]。

[ ARG-ST <[ ]>, CP [ SPR <[ ]NP> ] ]

一方、コントロールは主節の主語と補文の主語が単一化されず、同一指標を持つ。コントロール動詞の語彙項目は次のようになる。

[ ARG-ST <NP<sub>i</sub>>, CP [ SPR <NP<sub>i</sub>> ] ]

どちらであるか見分ける方法として、例えば英語では、虚辞が主語に立てるかどうかがあるが、ウイグル語には英語の虚辞に相当するものが存在しない。本研究では、イディオムの解釈を両者を見分ける方法として用いる。

イディオムは、ひとまとりになってはじめてイディオムの解釈が得られる。例えば日本語の「閑古鳥が鳴く」という表現には、「カッコウが鳴く」という文字通りの解釈と「客足が少なく商売がはやらない」というイディオムの解釈がある。ところが、「～終わる」をつけて「閑古鳥が鳴き終わった」とすると、イディオムの解釈が得られなくなる [5]。しかし表面的には同じような構造に見える「～始める」をつけたものは、イディオムの解釈が得られる [5]。この、解釈の違いは、繰り上げとコントロールの違いとして説明することができる [5]。繰り上げでは主節の主語と補文の主語が単一化される、つまり同じものである。したがって補文の中はひとまとりをしていない。一方、コントロールの方は、主節の主語と補文の主語は同一指標を持つだけで同じものではない。この場合「閑古鳥」は補文の中にはない。このため、補文の中はひとまとりをしていなく、イディオムの解釈ができない。この方法を用いて、ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」の構造を分析する。

(3) Tursun qolni tartiwetti. 「トルスンはあきらめてしまった。」

(4) Tursun höjetke qol qoyuwetti. 「トルスンは書

類にサインしてしまった。」

qolni tart- には文字通りの解釈「手を引っぱる」と、「あきらめる」「やめる」というイディオムの解釈がある。qol qoy- には「サインする」というイディオムの解釈がある。いずれも -wet- の形にした場合にもイディオムの解釈が得られる。したがって、「動詞語幹-(i)wet-」は、少なくともコントロール構造をとるものではないということができる。

以上、「動詞語幹-(i)wet-」は2語からなるものという仮定で議論してきたが、2語であると結論付けていいだろうか。1語、すなわち動詞が1つしかなく、補文構造をもたない場合でも上で見たイディオムの解釈は当然得られる。そこで、1語であるかどうかの検証も必要になる。

### 3.2 形態的緊密性

語とは何かを考える上で重要なのが形態的緊密性である<sup>[4]</sup>。ここでは「動詞語幹-wet-」が形態的緊密性に関してどのような性質をもっているか考察する。

#### 3.2.1 代用表現

形態的緊密性を調べる方法の一つとして、例えば日本語では「そうする」で言い換えることができるかということがある<sup>[4]</sup>。日本語の複合動詞には、レキシコンに1語として登録されていると考えられるものと、レキシコンには2語として登録されていると考えられるものがある<sup>[4]</sup>。それらは、「そうする」の言い換えにおいて違いが見られる<sup>[4]</sup>。例えば、「話しかける」という複合動詞を見てみると、「太郎はパーティーで会社の秘密を話しかけた。」は「次郎もそうしかけた」と言えるのに対し、「太郎はパーティーで留学生にトルコ語で話しかけた」を「話しかけた」という意味で「次郎もそうしかけた」と言うことはできない。「次郎もそうした」になる。このように、複数の要素からなると考えられるものの一部

だけを「そうする」にすることができない場合、レキシコンには1語として登録されていると考える。このテストを"shundaq qil-"（そうする）を用いてウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」に対して行くと、次のようになる。

(5) Tursun qelemni yerge chüshürüwetti. 「トルスはペンを床に落としてしまった。」 = (1)

(6) Gülnarmu shundaq qildi.

グルナル(人名)も (shundaq qildi)

(7) \*Gülnarmu shundaq qiliwetti.

グルナル(人名)も (shundaq qiliwetti)

(8) Bala kompyutрни buzuwetti. 「こどもがコンピュータを壊してしまった。」

(9) Apammu shundaq qildi.

母も (shundaq qildi)

(10) \*Apammu shundaq qiliwetti.

母も (shundaq qiliwetti)

このように、「shundaq qil-」は、「動詞語幹-(i)wet-」全体を受けるとしかできない。

#### 3.2.2 受身

形態的緊密性を考える上では、受身形がどのように作られるかを見る必要がある。上でとりあげた日本語の「話しかける」を見てみると、レキシコンに1語として登録されていると考えられるものは、「留学生はパーティーでトルコ語で話しかけられた／\*話されかけた。」のように、前の部分が受身形になることが不可能である。ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」が受身形になるときにどうなるか、すなわち、どの部分に受身を表す形式が付くかを見る。

(11) Tursun qelemni yerge chüshürüwetti. 「トルスがペンを床に落としてしまった。」 = (1)

(12) Qelem Tursun terepidin yerge chüshürüwet-il·di.

ペン トルスン によって 地へ 落とす・wet・受身・過去「ペンがトルスンによって床に落とされた。」

(13) \*Qelem Tursun terepidin yerge chüshür·ül·üwet·ti.

ペン トルスン によって 地へ 落とす・受身・wet・過去

(14) Düşmenning herbi paraxotni chöktürwetti.

「敵の軍隊が船を沈めた。」

(15) Paraxot düşmenning herbi terepidin chöktür·iwet·il·di.

船 敵の 軍隊 によって 沈・wet・受身・過去  
「船は敵の軍隊によって沈められた。」

(16) \*Paraxot düşmenning herbi terepidin chöktür·ül·üwetti.

船 敵の 軍隊 によって 沈・受身・wet・過去  
-wet- 前に来る部分を受身にすることは不可能であることが明らかになった。

以上のことから、代用表現 "shundaq qil-" による言い換えのテストでも、受身形によるテストでも「動詞語幹-(i)wet-」がひとまとまりになっていることができる。

### 3.3 レキシコンへの登録

前節でみたように、ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」はまとまりが強く、1語であることが強く示唆される。それでは、ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」は、レキシコンに登録されていると考えていいかという、生産性と意味の透明性のいずれもが低くなく、何とも言えない。1語ではあるが、レキシコンに登録されていないとすると、考えられるのは、屈折変化である。つまり、過去形という形がレキシコンへの登録ではなくて屈折変化によって得られるのと同じように、「動詞語幹-(i)wet-」も屈折変化によって得られるという分析である。形式化すると、「動詞語幹-(i)wet-」という形そのものはレキシコンに登録されなく、語彙規則によって「動詞語幹-(i)wet-」という形が得られるということになる。

レキシコンに登録されているのか、それでも屈折変化なのか、現時点では何とも言えず、

今後の課題である。

## 4. 結論

ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」の文法的性質を記述した。

ウイグル語の「動詞語幹-(i)wet-」は、形態的緊密性が高く、全体が一つにまとまっているということが明らかになった。

一つの語としてレキシコンに登録されているか、あるいはレキシコンに登録されているのは語幹で、-wet-形というものが屈折変化によって得られるのかはよくわからず、今後の課題である。

## 参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almuta. Mektep.
- [3] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.
- [4] 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版.
- [5] 影山太郎 (編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 大修館書店.
- [6] 橋本力 (2003) 「計算機上で動作する日本語 HPSG 文法の構築」『言語処理学会第9回年次大会発表論文集』 言語処理学会.